

# ブラジルにおけるメールマガジンを利用した 日本語教師ネットワーク構築の試み

現実に機能しうる日本語教師間ネットワークとはどんなものか

三浦多佳史・吉川一甲真由美エジナ・遠藤クリスチーナ麻樹

〔キーワード〕ブラジルの日本語教育、日本語教師間ネットワーク、メールマガジン、行動ネットワーク、参加型ネットワーク

## 〔要旨〕

150 万人といわれる日系移民を抱えるブラジルの日本語教育は、非日系ブラジル人学習者の大幅な増加やアニメやまんがに代表される、昨今の日本の若者文化に影響を受けた学習動機の変化など、個々の日本語教師では対応しきれない多様化が急激に進んでいる。こうした現状を踏まえ、独立行政法人国際交流基金サンパウロ日本文化センターではブラジル内外の日本語教師を対象にインターネット通信「メルマガこうししつ」を配信し、日本語教師間ネットワークの構築を試みた。本稿では、ブラジルで機能しうる日本語教師間ネットワークとはどんなものであるかを考察し、「メルマガこうししつ」を媒介とするグループが日本語教師間ネットワークとして機能しているかどうかを検証した。その結果、実際に行われている「行動ネットワーク」は義務のほとんど存在しない極めてゆるい連帯であるが、情報の共有やメンバー同士の交流が頻繁に行われていることが確認された。

## 1. ブラジルになぜ日本語教師間ネットワークが必要か

### 1.1 ブラジルの日本語教育の特徴

ブラジルの日本語教育を大きく分けると、次の4つのタイプになる。

- (1) ブラジルへの日本移民が開始された1908年から続けられてきている継承語としての日本語教育を行う日本語学校。学習者の多くは日系移民で年少者であったが、最近では非日系ブラジル人や成人の学習者も増えつつある。
- (2) 初等・中等教育段階の学校教育における日本語教育
  - (ア) 1989年からサンパウロ州とパラナ州の州立学校内で行われている公教育での課外講座。
  - (イ) 私立の初等・中等教育の学校で行われている必修科目、または、選択外国語科目としての日本語講座。
- (3) 一般学習者に公開されている日本語講座

- (ア) 大学など高等教育機関で行われている課外講座としての日本語講座。広く一般学習者を対象としており、成人が多いが、中には年少者向けの講座を開設している大学もある。
- (イ) 英会話学校など同様の、語学学校での日本語講座。
- (4) 高等教育段階の学校教育における日本語教育
  - (ア) 大学の選択外国語科目としての日本語講座。理科系、文科系を問わず、学生は単位取得科目として日本語を学ぶことができる。
  - (イ) 日本語・日本文学・日本文化の主専攻課程として6つの大学で行われている、高等教育での日本語講座。

ブラジル日本語センター(旧日本語普及センター)はブラジル最大の、各地の日本語学校をまとめる団体で会員数は900人(法人会員を含む)を超えている<sup>(1)</sup>。ここは、教師研修や学習者向けの子供も日本語テスト、スピーチコンテストサンパウロ地区大会などを実施しており、多くの教師がここを拠点に情報交流などを行っている。ブラジル日本語センターに集う教師は、そのほとんどが(1)で日本語を教えている教師で、日本語を外国語としてではなく、日系社会の継承語として教える、「国語的」な教え方をしている場合が多い。しかし、昨今の新しい世代の学習者に対しては従来のやり方ではうまくいかないケースも出てきており、新しい学習者層に対応するため、外国語として日本語を教える方法を身につける必要性を感じている教師も多い。

(2)の初等・中等教育段階の学校教育における日本語講座は、圧倒的に非日系ブラジル人の学習者が多く、教師も外国語としての日本語教育を意識して教えている人が多い。様々な学習動機をもつ学習者が集まってきており、数も増加傾向にあるが、教師は(1)の分野の教師との交流の機会はほとんどなく、また(ア)(イ)間の交流もほとんど行われていない。

(3)の一般学習者向けの講座の学習者も(2)と同様、非日系ブラジル人の学習者が多数を占める。学習動機も日本へ留学したい、日本で働きたいという具体的な目標を持っている学習者から、アニメ・マンガに代表される日本の若者文化に興味があって勉強しているという学習者まで、多様な目的を持つ学習者が集まっている。これらの日本語教育機関の中には、独自のメソッドに基づく教師トレーニングを行っている機関もある。(ア)は高等教育機関で行われている一般公開講座であるが、ここで教える教師と、(4)の大学で日本語を教える教師との交流はあまり行われていない。

大学の選択外国語科目としての講座は3大学、専攻課程の一部としての日本語講座は6大学で開かれていて、講座の目的はさまざまである。日本語・日本文学・日本文化の主専攻課程では、特に日本語教育をメインとしているわけではなく、「日本文学」や「日本文化」などの科目と並んで「日本語」という科目が設けられている。講座の目的は、教員養成、翻訳家養成、日本研究者育成などであり、それぞれの大学が独自のカリキュラムを立てている。講師・教授陣は、日本語学、国語学、日本文学、日本文化、対照言語学などの専門家が多いが、日本語教育を専門とし

ているものは殆どいない。

これら 4 つの分野の日本語教育はそれぞれが独自のやり方で講座を運営している。それぞれの領域内での教師同士の交流は行われているが、異なる分野の機関に属する教師間の交流は今のところほとんど行われていない。その背景には様々な思惑や理由が存在していると思われるが、縄張り意識や強い帰属意識が垣根となっているものと想像される。

## 1.2 多様化する学習者

2003 年に実施された海外日本語教育機関調査によれば、ブラジルにおける日本語教育の現状は、前回調査（1998 年）に比べて学習者数で 3000 人あまり、教師数で 250 人、機関数で 80 機関増、増加している。いずれも学校教育分野での伸びが、それ以外の分野の伸びよりも顕著であった。ここでいう学校教育以外と言うのは、主に日系植民地域に作られた、当初目的が継承語としての日本語教育を行なう日本語学校のことである。前回調査と比べたこの分野の数の増加は、割合としてそれほど多くはないので、調査表の回収率などの誤差の範囲ではないかとも考えられる<sup>(2)</sup>。

それに対し学校教育分野での学習者数、教師数、機関数の増加は、5 割から 10 割以上の増加となっており、顕著であるといえる（表 1）。さらに詳しく内容を見てみると、初等・中等教育、高等教育いずれの分野でも著しい伸びを示している（表 2）。初等、中等教育段階で日本語教育を実施している 37 機関のうち、27 機関がそれぞれサンパウロ州とパラナ州で行なわれている課外外国語講座としての日本語教育である。

しかし、顕著な伸びを示していると言っても総増加数では、学習者数で 2000 人に満たない程度の幅であり、これからどんどん増えていくのか、微増にとどまっていくのかは予想が難しい。調査結果と、巡回指導などで耳にする現場の先生方の声を基に、これからのブラジルの日本語教育の状況を考えると、次のようなことがいえる。

### （1）非日系学習者数の増加

正確な調査はまだ行われていないが、各地の

表 1 教育機関別比較

#### 学習者数

	学校教育	学校教育以外	合計
2003 年調査	4703	15041	19744
1998 年調査	3084	13594	16678

#### 教師数

	学校教育	学校教育以外	合計
2003 年調査	130	996	1126
1998 年調査	76	796	872

#### 機関数

	学校教育	学校教育以外	合計
2003 年調査	55	327	382
1998 年調査	25	279	304

表 2 教育段階別比較

#### 学習者数

	初等中等教育	高等教育	合計
2003 年調査	3154	1549	4703
1998 年調査	2299	785	3084

#### 教師数

	初等中等教育	高等教育	合計
2003 年調査	66	64	130
1998 年調査	43	33	76

#### 機関数

	初等中等教育	高等教育	合計
2003 年調査	37	18	55
1998 年調査	17	8	25

教師の実感として、日系ブラジル人以外の学習者が格段に増加しているのは間違いのない事実のようである。これはいわばブラジル、南米移民国の日本語教育の特殊性、日系ブラジル人子弟のための継承語教育として長い歴史を持つという特殊性が薄れつつあることの証であるといえる。

#### (2) 学習動機の多様化、希薄化

非日系ブラジル人学習者の増加、家庭で日本語を用いない日系ブラジル人学習者の増加に伴い、学習動機も多様化していると考えられる。アニメ・まんがなどのポップカルチャーに代表される若者文化への興味関心、柔道や武道など伝統的日本文化、および映画や演劇などの現代文化への関心の高まりなどを学習動機に挙げる学習者も多い。その反面以前からの、日系人であるからとか、家族に勧められてといった、消極的、希薄な動機も依然として存在している。

#### (3) 日系ブラジル人子弟学習者の日本語学習レディネスの変化

日系ブラジル人子弟学習者の学習レディネスの変化は、家庭使用言語としての日本語がもはや存在しなくなっている状況を物語っており、この意味では学習者の背景は均一化の方向へ向かっているといえるかもしれない。

これらは教師の立場から見たブラジルにおける日本語教育の多様化の特徴であると言える。一方、学習者の立場から見ても、多様化への対応の遅れの結果として、1) 教育機関選択の幅の狭さ、2) 必要な情報の不足、3) 学習インセンティブの欠如、4) 継続学習の場の不足、などが問題として横たわっているといえる。

以上述べてきたブラジルにおける日本語教育の特殊性と多様化に対応することは、教師一人一人の努力では難しい面も多々あるのではないかと想像される。昨今世界各地で日本語教師間のネットワークが形成され、個人あるいは個別の団体の情報や経験を共有する試みが広く行われているが、こうした全国規模のもので、先にあげた4領域の垣根を超えた日本語教師間ネットワークこそ、広大な国土を持つブラジルの日本語教育に必要とされるものなのではないだろうか。

## 2. ブラジルで機能しうる日本語教師間ネットワークとはどんなものか

### 2.1 これまでの日本語教師間ネットワークの弱点

現在活動している世界各地の日本語教師会、日本語教師間ネットワークにおいていくつかの問題点が指摘されている。まず会員個々の積極性、自主性の問題である。李(2003)は公的機関の支援によるネットワーク形成の問題点として

「現在国際交流基金を中心に日本語教師のグローバル単位のネットワークづくりが活発に展開されつつある。しかし、公的機関だけの主導によるネット・ワークはその高い効率にもかかわらず、活動の自主性や活性化の点において必ずしも望ましいとは限らない。「支援」という名の下での縦の関係によるネットは、参加者の態度が受身に陥りやすく、ネット活動の「花」とでもいえる

相乗効果までは期待しがたいからである。横の関係の自主的なネット化が待たれるゆえんである。」(李 2003 : 8)

と述べ、活動の自主性や活性化が課題であると指摘している。また 2001 年に国際交流基金が開催した日本語教師会・学会国際シンポジウム<sup>(3)</sup>でも、オーストラリア・ビクトリア州からの参加者や英国日本語教育学会からの参加者がいかに会員を会に積極的に参加させるかが課題であると指摘し、あるいは、積極的に参加するものとそうでないものの会員の二層化が進んでいることが問題であると述べている<sup>(4)</sup>。

次に、特に海外で組織された日本語教師間ネットワークでは、会員のほとんどが日本人で占められるという問題点が指摘されている。西谷 (2002 : 85) は長春で立ち上げたメーリングリストを媒介とするネットワークについて報告している。登録者数 56 名のうち中国人登録者はわずか 6 名のみであり、さらに中国人教師の発言はほとんど見られず、自己紹介以外にはまったく発言しないメンバーも多いことを問題点としてあげている。また石井 (2003) によると、フランス日本語教師会の場合も会員数 110 名のうちフランス人教師はわずか 8 名しかいない。その理由として次のように述べている。

「日本語教育に対する考え方の相違が考えられる。彼ら (フランス人教師) は大学で受けた伝統的な日本語教育を受け継いでおり、現在世界で主流を占めているコミュニカティブな日本語教授法にはむしろ消極的である。今後の課題はこれらフランス人教師とコンタクトを密にし相互理解を図ることであろう。」(石井 2003 : 4)

先に述べた 2001 年に開催された国際シンポジウムの席上でも西原鈴子日本語教育学会会長(当時)が学会の学術活動や社会的貢献の推進について、「日本語教育学会あるいは日本語教育学会の日本語を母語とする会員たちが、「本家意識」というか、「家元意識」をやめる意識の改革」と「日本語母語話者の手にだけ日本語があるのではないという認識で推進すること」の必要性について指摘している<sup>(5)</sup>。

そして第三の問題点としてはネットワークの構成メンバー個々のニーズにどう対応していくかということが挙げられる。インドネシア日本語教育学会は会員数 300 名の大規模なネットワークであるが、規模が大きいだけに次の点を問題点としてあげている。

「学会のセミナーに対する期待やニーズは高くさまざまなので、すべての会員のニーズにこたえることが難しい。(中略)つまりそれぞれの教師が持っている問題について話し合う十分な時間が少ないということです。(中略)各支部はそれぞれに問題がありますが、主なものは次のよ

うなことだと思います。まず勉強会などの活動が計画通りにすすんでいない。というのも会員の都合のいい日を決めたり、会員の要求に応える適当な項目を決めることも難しいからです。」(国際交流基金日本語国際センター 2002: 34)

これら問題点について整理すると、1)メンバーの自主性や積極性を確保し、ネットワークの活動を持続的に活性化させるにはどうしたらよいか、2)誰のためのネットワークであるのか、3)メンバーがそれぞれ満足するネットワークとはどんなものであるのか、といったことが解決すべき課題として浮かび上がってくる。

## 2.2 ブラジルで機能しうるネットワークの枠組み

筆者が勤務する独立行政法人国際交流基金サンパウロ日本文化センター講師室(以下講師室)はブラジルにおける日本語教育支援事業として教師、学習者、教材それぞれへの支援プログラムを企画・実施している。2003年11月に開始した「メルマガこうししつ」の配信サービスは、日本語教師への支援事業の一つとして実施されている。当初よりメールマガジンの配信による、講師室を中心とした日本語教師のつながりを、全国規模の日本語教師間ネットワークに育てられないかとの思いで始められたものである。開始にあたり、前述のブラジルにおける日本語教育の特徴と世界各地の日本語教師間ネットワークが直面している課題を念頭において、現在ブラジルで必要とされている日本語教師間ネットワークとはどんなものであるかを詳しく検討した。その結果次の4項目が特に重要であると考えられた。

(1)「ネットワークを構成するメンバーになんらかの義務や負担が生じない、ゆるい連帯のネットワーク」

金子(1986)はネットワークを「統制型ネットワーク」と「参加型ネットワーク」という二つのタイプに分類している。それによれば「全体の目的を先ず設定し、その達成のためにメンバーの役割分担を決め、メンバーがその役割を果たすように規則や罰則を作ることでメンバーの統制をする形のネットワーク」を「統制型ネットワーク」、「メンバー各自がネットワークに属することが自分にとって何らかの利益につながるということを自主的に判断して、メンバーの参加の原則で構成されるネットワーク」を「参加型ネットワーク」とよんでいる(金子1986: 30-31)。上述の各地の日本語教師間ネットワークで問題点として挙げられている、参加者の自主性、積極性の欠如の問題は、そもそもネットワークに参加する際に自発的であったかどうか、ネットワークから受ける恩恵と自らが提供する役務の量を天秤にかけた場合に、どちらに比重が掛かるか、といった人間ならば当然持っているであろう打算的な面が大きく影響しているとも考えられる。義務や負担が極めて少ない、ゆるい連帯のネットワークを目指すということは、メンバーにとって恩恵はあるけれども負担が少ないという大きなメリットを与えることになる。この「参加型ネットワーク」の姿勢を貫くことで、ネットワークの持続性も保証されるのではないかと考えた。

(2)「縄張り意識や帰属意識のきわめて薄い、垣根の存在しないネットワーク」

先に述べた、ブラジルにおける4種類の異なるタイプの日本語教育を垣根を越えて交流させるためには、当初はネットワークとして意識していなくても、自然と垣根を越えたネットワークとして機能しうる、自然発生的なネットワークを目指す必要がある。

(3)「日本語が母語でない教師に配慮した日本語教師間ネットワーク」

ブラジルの日本語教育の現状の項でも述べたが、日系社会においても、日本語を母語とする日本語教師は減少傾向にある。さらには日本語を外国語として学習した日本語教師はこれからますます増えていくものと思われる。また先の問題点の指摘の項でも、メンバーの多くが日本語母語話者で占められたネットワークの例が挙げられたが、ブラジルでもこのような状況の中、増えつつあるノンネイティブ教師に配慮することは重要であろう。

(4)「遠隔地においてもメンバーが必要なときに、必要な役割を果たせる双方向性を有するネットワーク」

広大なブラジルの国土に散在する日本語教師の環境を考慮し、メンバー個々のニーズにできるだけ応えるためには、何らかの手段を用いて、双方向でコミュニケーションができるネットワークが必要である。

以上4点を念頭において、ブラジルで十分に機能しうる日本語教師間ネットワークを目指して、メールマガジン「メルマガこうししつ」の配信サービスの検討を始めた。

### 3. 「メルマガこうししつ」の概要

#### 3.1 「メルマガこうししつ」をネットワークに育てるために

金子（前掲書：7）はネットワークという概念の大枠として「複数の「モノ」がある程度持続性のある何らかの関係を基礎にある種のまとまりを形成しているもの」と定義している。メールマガジンを媒介とした日本語教師間ネットワークをこの定義に当てはめると「複数の日本語教師がある程度持続性のあるメールマガジンの読者であるという関係を基礎に、日本語教育関係者というまとまりを形成しているもの」ということになる。この定義で重要なのは、これから配信されるメールマガジンが「ある程度持続性のある」メールマガジンでなければならないという点である。読者にある程度持続的に購読してもらえるメールマガジンとはどのようなものであるかを講師室で調べたところ、発行頻度、文字数、レイアウトの工夫、テーマの定め方などいろいろな要素があることがわかった。また何よりも重要なのは内容が如何に読者の興味をひくか、読者にとって役に立つ、喜ばれるものであるか、ということである。

検討の結果、発行頻度は2週間に一回程度、本文の文字数1000～1200字で、内容は主に「授業に役立つテクニック」、「日本語文法の解説」、「国際交流基金主催事業の情報」、「最新の日本事情」、「その他の日本語教育関連情報」などを原則として1回につきひとつずつ取り上げることに

なった。

「メルマガこうししつ」は登録時に申し込み用紙に必要事項を書き込むだけで、あとはメンバー本人が必要であると感じるとき以外はまったく何の義務も役務も存在しないものである。もしこのまとまりがネットワークと呼べるものに成長するとすれば、非常にゆるい連帯の、しかししっかりと「参加型ネットワーク」に育つのではないかと期待された。また登録の呼びかけは、講師室が関係する教師研修会やセミナー、講演会などを通じて口コミで広めていった。このことは結果として「メルマガこうししつ」への参加がまったく教師個人の意思で行われることになり、所属団体や個人的な人間関係に縛られない、メンバー間に垣根や帰属意識の存在しない、自由な集まりにすることに有効に働いた。さらに、将来急激にその数が増えていくと予想される、日本語を母語としない教師にも気軽に読んでもらえるよう、日本語とポルトガル語のバイリンガルメールマガジンとして発行した。そして読者からの問い合わせや質問に答える窓口も設置し、常に双方向のコミュニケーションができるように配慮されている。

### 3.2 「メルマガこうししつ」発刊から現在までの経過

2003年11月24日「メルマガこうししつ」第1号は配信された(図1)。第1号のテーマは「やじるしパネルの使い方」、配信登録者数は40名でのスタートだった。それから2年足らず、2005年9月14日に第45号を配信し、その時点で登録者数は666名を数えている。45号までの掲載記事は「授業に役立つテクニック」が29回、「日本語文法の解説」11回、「国際交流基金主催事業の情報」3回、「最新の日本事情」1回、「その他の日本語教育関連情報」1回などとなっている。毎回「どうすれば学習者がもっと日本語で話

図1 「メルマガこうししつ」第1号

国際交流基金サンパウロ日本語センター  
メルマガ こうししつ  
第1号 (2003年11月24日発行)

第1号のメニュー  
【発刊のごあいさつ】  
【そっと教える授業のテクニック】やじるしパネルの使い方

発刊のごあいさつ  
ブラジルで日本語を教えたり学習したりしている皆様。こんにちは。  
国際交流基金サンパウロ日本語センター講師室から、ついにメルマガ「こうししつ」をお届けすることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

すようになるか」、「類義語の説明はどうすればわかりやすいか」、「漢字を楽しく学ぶにはどうすればいいか」といった、現場の教師にとって身近で、具体的なテーマを取り上げている<sup>6)</sup>。登録者の多くはブラジル在住の日本語教師だが、他にもペルーやアルゼンチン、コロンビア、キューバなどの中南米諸国、北米、さらには日本国内やタイ、マレーシア、ベトナムなどのアジア諸国にまで広がっている。ブラジルでもインターネット環境整備は急ピッチで進められているが、まだまだパソコンが自由に使える環境にない人も多い。そんな人たちのためにeメールによる配信だけでなく、郵送による送付もあわせて行っている。666名のうち200名が郵送を利用しており、これらの人たちへの配信は2号分をあわせて月1回となっている。

講師室へは「メルマガこうししつ」に関する様々なコメントが送られてくるが、その多くが「メ



「メルマガこうししつ」の内容が日々の教授活動にたいへん役に立っているというものである。後述する、2005 年 7 月に実施した「メルマガこうししつ」の内容に関するアンケート調査でも、アンケートを返送した読者のすべてが「メルマガこうししつ」は役に立っていると答えている。

また「メルマガこうししつ」のバックナンバーは <http://homepage3.nifty.com/miuratakashi/> 上で公開しているが、こちらへのアクセス数も 2005 年 5 月が 1376 アクセス、6 月が 1512 アクセス、7 月は 2152 アクセスで 8 月が 1740 アクセスとなっている。

## 4. 「メルマガこうししつ」は日本語教師間ネットワークとして機能しているか

### 4.1 放射状ネットワークと網の目型ネットワーク（図-2）

666 名のメンバーを有する「メルマガこうししつ」が実際に日本語教師間ネットワークとして機能しているかどうかは非常に興味深いところである。先に、常に読者からの質問や問い合わせに答えられるよう窓口を設置していると述べたが、現在までに 100 を超える質問やコメントが寄せられている。これらには講師室で担当者を決めてひとつひとつ丁寧に返事をするようにしているが、このことだけでも双方向の一種のネットワークを形成しているといえる。メンバーが必要とするときに必要な情報を送ることができるよう最大限の配慮を行うことで、「参加型ネットワーク」として機能するよう努めている。しかしこれは双方向であるとはいえ、あくまでもメンバー個人と、「メルマガこうししつ」を配信している講師室との放射状のネットワークである。ではメンバー相互の知識の交換や情報交流という網の目型のネットワークは発生していないのであろうか。

### 4.2 網の目型ネットワークの検証

ニュースブトニー（1995：8）によれば、ネットワークにはネットワークの具体的な使用に焦点が置かれる「行動ネットワーク」と、「行動ネットワーク」をおこすための人の集まりである「グループネットワーク」の二つの側面がある。

図 2-1 放射状ネットワーク

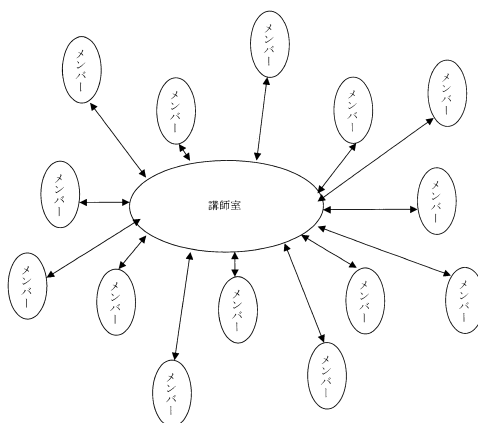
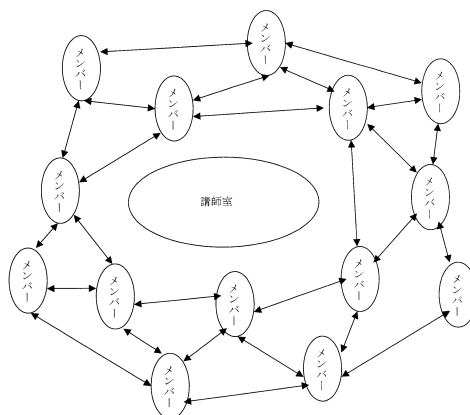


図 2-2 網の目型ネットワーク



そして「グループネットワーク」の中には、形骸化して実際にはほとんど「行動ネットワーク」を伴わない、非常に「弱い」ネットワークも存在しているといっている。そう考えると、逆に「行動ネットワーク」は頻繁に行われているが、メンバーがそれを「グループネットワーク」であると意識していない場合もあるのではないだろうか。そこで、この「行動ネットワーク」の具体例を集めることで、その「グループ」が「グループネットワーク」になっていることを検証できるのではないかと考えた。具体的には「メルマガこうししつ」の読者グループの中に、何らかの「行動ネットワーク」がおきているかどうかを調べることによって、「メルマガこうししつ」の読者間で、網の目型ネットワークが機能しているかどうかを検証できると考えたのである。

2005年7月に「メルマガこうししつ」読者グループに「行動ネットワーク」が発生しているかどうかを調べるために、「メルマガこうししつ」配信登録者を対象にアンケート調査を実施した。アンケート回収数は53通である。「メルマガこうししつ」を受け取ることによって読者がどのような行動をとったかを調べることを狙いとした、主に3つの質問を行った。

まず、「「メルマガこうししつ」で得た知識を他の人に伝えたことがあるか。誰に伝えたか。」という質問では、53人中44人の読者が「伝えたことがある」と回答した。伝えた相手は「他の先生」が最も多く24名、「自分の学習者」が23名で、他に家族や学習者の保護者といった回答があった。

次に、「「メルマガこうししつ」の購読をほかの人に勧めたことがあるか。その理由は何か。」という質問を行った。勧めたことがある人は31人で、そうでない人は21人だった。他の人に勧める理由は「内容がわかり易く勉強になる」といったものが多かったが、「同じ地区の教師と共通のテーマを持ちたい」、「教師が孤独に陥らないため」、「サンパウロから離れていても(教師同士)いい繋がりになる」といった、教師間ネットワークを意識した理由も見られた。また日本語とポルトガル語のバイリンガルマガジンであることが、多くの先生方に勧めやすい理由になっているとの指摘もあった。勧めていない理由は、周りの先生方はもうすでに登録していたり、町の中に他に日本語の先生がいないといった物理的理由が多かった。

そして「「メルマガこうししつ」を読むことによって、何か具体的な行動をしたことがあるか。どんなことをしたか」に対しては、「したことがある」と答えた人が37人で「いいえ」と答えた16人を大きく上回った。「メルマガこうししつ」を仲立ちとした、読者グループによるなんらかの行動ネットワークが行われているということである。具体的には「メルマガこうししつ」で取り扱ったテーマについて教師仲間と話し合った」が最も多く25人だった。「メルマガこうししつ」を仲立ちに、日本語教師同士の情報交流が行われている顕著な例であろう。また「メルマガこうししつ」で紹介されたテクニックなどを実際に教室でやってみた」人も19人いた。そのほか「メルマガこうししつ」をコピーして他の教師に配った」人が5人、「学校の壁に貼り出している」人も3名いた(表3)。

表3 アンケート調査による行動ネットワークの例（アンケート回収数 53 通）

・「メルマガこうししつ」で得た知識を他の人に伝えた .....	44 人
・「メルマガこうししつ」の購読を他に人に勧めた .....	31 人
・「メルマガこうししつ」で取り扱ったテーマについて教師仲間と話し合った .....	25 人
・「メルマガこうししつ」をコピーして他の教師に配った.....	5 人
・「メルマガこうししつ」を学校の壁に張り出した.....	3 人

アンケート以外でもこのような「メルマガこうししつ」を仲立ちとした読者グループによる「行動ネットワーク」の事例も寄せられている。ある地方都市の教師グループでは「日本語教師養成講座で、時々メルマガを教材として使用している。特に日本語を母語としない教師の場合、一人で読むには少し時間がかかってしまう人やときどき内容が理解できない人がいる。みんなで読むことによって、書かれていることを正確に把握するよう努めている。」といった話を聞いた。メルマガの情報を既存の教師ネットワークに活用している例であろう。

アンケートの回収数が 53 通と少ないために、どの程度「行動ネットワーク」が行われているのか正確な把握は難しいが、全体では相当数の「行動ネットワーク」が発生していると考えてもよさそうである。「メルマガこうししつ」読者は日本語教育に関する情報を必要と感じたり、疑問点が生じたときには 1) 郵便や電話、メールで講師室に問い合わせる、あるいは 2) 他の「メルマガこうししつ」読者に聞いたり、話し合ったりするという解決の手段を持ったことになる。おそらくこれらの「行動ネットワーク」を起こした読者は、それが網の目型ネットワークであることを意識していないと予想される。「メルマガこうししつ」は 1) 義務や負担の伴わないたいへんゆるい連帯で、2) 縄張り意識や帰属意識の薄い、3) メンバーが必要なときに必要な役割を果たせる、自然発生的な日本語教師間ネットワークを形成していると言ってよいのではないだろうか。

## 5. 「メルマガこうししつ」自然発生的ネットワークのこれから

### 5.1 日本語教師間ネットワークの目的

「メルマガこうししつ」が仲立ちをする、自然発生的な日本語教師間ネットワークが本当に形成されているかどうかの検証を行ってきた。本稿では何らかのネットワークが形成されたとの立場をとっている。ここで日本語教師間のネットワークというのはなぜ必要か、ということを再び考えることは重要である。なぜならば、目的を再考することで、この自然発生的ネットワークに欠けているものや、さらに付加が可能なことが見えてくるからである。

先述の 2001 年に開催された国際シンポジウムの討議の席上で、教師間ネットワークがなぜ必

要かという問いに対し1)情報の共有、2)団体交渉権の取得、3)交流のための基地、の3点が提示されている(日本語国際センター2002:79)。このうち「参加型ネットワーク」である「メルマガこうししつ」がその主たる目的としているのは1)の情報の共有と3)の交流のための基地であろう。

## 5.2 「情報共有」の拡大

上で述べた「メルマガこうししつ」を仲立ちとする自然発生的なネットワークの「行動ネットワーク」は多くが「情報の共有」に関するものである。それも講師室から配信された「メルマガこうししつ」に書かれた情報を、届かなかった人たちに届けたり、あるいはその内容を吟味するために話し合ったりするものが多い。この目的をさらに広げ、かつ有効なものにしていくには、講師室からの情報発信だけでなく、メルマガ読者からの情報発信も可能にしていくことであろう。現在次のステップとして可能性も含めて検討しているのは、まず、メルマガの原稿執筆を外部の専門家や教師に依頼することである。講師室のメンバーは常に日本からの新しい情報や知識を得やすい立場にいますので、引き続き執筆を続けていくが、そのほかにも、外部の識見豊かな専門家や教師に依頼して、日本語教師にとって、異なった角度からの有用な情報を「メルマガこうししつ」を使って発信していくのである。また、講師室に寄せられる、読者からのいろいろなコメントや体験談をまとめて、メルマガに掲載することも考えられる。「メルマガこうししつ」は「参加型ネットワーク」である。掲載された情報がメンバーにとって有効であるかそうでないかは本人の判断によるものである。多くの人にとって有効になるためには、大勢のいろいろなタイプの発信者を持つ必要があるだろう。

## 5.3 交流の基地として機能するために

「メルマガこうししつ」を情報メディアとして活用し、地域の教師研修会や、特定分野の講演会などの企画を広く「メルマガこうししつ」の読者に情報提供するコーナーを設けている。読者同士の情報交換の場を提供することで、垣根を越えた交流の手助けができないかとの思いからである。まだ例は少ないが、だんだん活発に情報が提供されるようになれば、交流の基地としての機能も発揮されるようになるだろう。実際に「メルマガこうししつ」を媒介として自然に生まれたネットワークが交流の基地として機能しているかどうかは別に検証する必要がある。本稿で言及した「行動ネットワーク」のいくつかは、「メルマガこうししつ」の読者が集まって話し合いをしたことが確認されており、広い意味での交流の場を作っているともいえる。しかし、その多くは学校の職員会議の席上であったり、職場の同僚同士のお茶の席であったりするもので、「メルマガこうししつ」からできたネットワークが交流の場を設定したものとはいえない。今回検証した「行動ネットワーク」の中に、「メルマガこうししつ」を教師養成講座の教材として使用している例があった。たとえば「メルマガこうししつ」をみんなで読む会、のようなものが組織され、「メルマガこうししつ」を読むことによって教師同士の交流が生まれる場が作られたとした

ら、それは「メルマガこうししつ」から発生したネットワークが交流の基地として機能した例といえるだろう。「メルマガこうししつ」を継続していけば、将来そのような例が報告されることがあるかもしれない。

## 6. おわりに

「メルマガこうししつ」から自然に生まれる日本語教師間ネットワークが、「義務や負担が極めて少ない、ゆるい連帯」で、「縄張り意識や帰属意識が薄く、垣根の存在しない」、「日本語が母語でない教師に配慮した」そして「メンバーが必要とするときに必要な役割が果たせる」参加型ネットワークであるかどうかの検証を試みてきた。もちろんまだまだ成長の過程にあるので、結論を出せる段階ではないが、ある程度、当初の目標に近づきつつあるのではないかと思う。

本稿では「義務や負担の極めて少ないゆるい連帯」であることを繰り返し強調しているが、では、月に2回という、決して少なくない頻度でインターネット通信を配信し続けるという労力はどう評価するのかという問題があるかもしれない。国際交流基金サンパウロ日本文化センターはいくつかの主要な業務の柱の一つとして、ブラジルにおける日本語教育支援をあげている。講師室のスタッフは具体的に現場で業務を遂行する立場であり、「メルマガこうししつ」の発行もその業務の一部である。言い換えればそういう立場にある国際交流基金サンパウロ日本文化センター講師室であるからこそ、担うことのできる仕事であるといえるのではなからうか。

謝辞：本稿で使用したデータの整理は国際交流基金サンパウロ日本文化センター講師室非常勤講師遠藤テレザ泰子さんにご協力いただいた。そのほかアンケートにご協力いただいた各分野の先生方に心より感謝を申し上げる。

### 〔注〕

- <sup>(1)</sup> 国際交流基金日本語国際センター「日本語教育国別情報 教師会・学会一覧」 [http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/g\\_s\\_america.html](http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/g_s_america.html) 2005年8月24日参照による。
- <sup>(2)</sup> 本調査ではブラジルの日本語学習者数は19744人で、学校教育が4703人、学校教育以外が15041人という結果であった。93年調査と比較すると学校教育分野で約50%の増加に対し、学校教育以外では10%程度の伸びにとどまっている。(国際交流基金『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2003年』)
- <sup>(3)</sup> 日本語教師会・学会国際シンポジウム「国境を越える日本語教育 地球規模でのネットワーク作りを目指して」2001年10月27日国際交流基金日本語国際センター主催
- <sup>(4)</sup> 国際交流基金日本語国際センター(2002)27ページおよび53ページ
- <sup>(5)</sup> 国際交流基金日本語国際センター(前掲書)37ページ
- <sup>(6)</sup> 「メルマガこうししつ」各号の特集は添付資料参照。

〔参考文献〕

- 李 徳奉(2003)「転換期を迎えた日本語教育に求められるもの」『日本語教育』119号 1-10
- 石井陽子(2003)「海外日本語教育レポート第4回 フランス日本語教師会の活動と課題」『日本語教育通信』46号 3-5
- 金子郁容(1986)『ネットワーキングへの招待』中公新書
- 国際交流基金サンパウロ日本語センター編(2003)『ブラジルの日本語教育 初等・中等・高等教育の学校と講座』
- 国際交流基金日本語国際センター(2002年)『日本語教師会・学会国際シンポジウム報告書 国境を越える日本語教育 地球規模でのネットワーク作りを目指して - 』
- 西谷まり(2002)「海外における日本語教師ネットワーク」『一橋大学留学生センター紀要』第5号 77-91
- ネウストブニー、J.V.(1995)「日本語教育のネットワーク-ランゲージマネージメントの観点から-」『ひろがる日本語教育ネットワーク』1-15、日本語教育学会
- 春原憲一郎(1995)「国内における日本語教育ネットワークの必要性」『広がる日本語教育ネットワーク』16-33、日本語教育学会

## ブラジルにおけるメールマガジンを利用した日本語教師ネットワーク構築の試み

### 資料

- |   |   |
|---|---|
| 第 1 号 (2003.11.24.)「やじるしパネルの使い方」                  | 第 22 号 (2004.10.11.)「カタカナの話」                    |
| 第 2 号 (2003.12.08.)「～います、～あります の練習が<br>楽しくなるぞ」    | 第 23 号 (2004.10.25.)「ことばと文化」                    |
| 第 3 号 (2003.12.22.)「なりきり自己紹介で盛り上がりよう」             | 第 24 号 (2004.11.8.)「易から難の法則」                    |
| 第 4 号 (2004.01.12.)「学習者にもっと話してもらおう」               | 第 25 号 (2004.11.22.)「もうすぐ日本語能力試験」               |
| 第 5 号 (2004.01.26.)「漢字はいやだ？むずかしい？その<br>1」         | 第 26 号 (2004.12.06.)「ローマ字とカタカナの使い方」             |
| 第 6 号 (2004.02.09.)「漢字はいやだ？むずかしい？その<br>2」         | 第 27 号 (2004.12.20.)「コンピュータと人間の関係」              |
| 第 7 号 (2004.03.01.)「ポルトガル語のパソコンで日本語<br>が読める？書ける？」 | 第 28 号 (2005.1.10.)「パソコンで何ができるか」                |
| 第 8 号 (2004.03.15.)「すしテストってなんだ？？？」                | 第 29 号 (2005.1.24.)「中級の授業を始めるために」               |
| 第 9 号 (2004.03.29.)「教室の外で日本語を使う環境のこと」             | 第 30 号 (2005.2.14.)「中級の授業を始めるために 2」             |
| 第 10 号 (2004.04.12.)「黒板と家族名称の話」                   | 第 31 号 (2005.2.28.)「新日本語の基礎の復習ビデオはい<br>いビデオ」    |
| 第 11 号 (2004.05.03.)「学習者が少しでも話せるようにな<br>るために 1」   | 第 32 号 (2005.3.14.)「日本語を使うときの失敗例」               |
| 第 12 号 (2004.05.17.)「学習者が少しでも話せるようにな<br>るために 2」   | 第 33 号 (2005.3.28.)「と、ば、たら、なら」                  |
| 第 13 号 (2004.05.31.)「意味の似たことばの説明。どうし<br>たらいいの？ 1」 | 第 34 号 (2005.4.11.)「日本語の発音と日本の習慣に関す<br>る失敗例」    |
| 第 14 号 (2004.06.14.)「意味の似たことばの説明。どうし<br>たらいいの？ 2」 | 第 35 号 (2005.4.25.)「いま日本で売れてます「問題な日<br>本語」のご紹介」 |
| 第 15 号 (2004.06.28.)「発音の練習。どうしてますか。」              | 第 36 号 (2005.5.9.)「人という言い方の持つ意味」                |
| 第 16 号 (2004.07.19.)「勉強のし方ややり方ストラテジー<br>1」        | 第 37 号 (2005.5.23.)「ひらがなを定着させるために」              |
| 第 17 号 (2004.08.02.)「勉強のし方ややり方ストラテジー 2」           | 第 38 号 (2005.6.6.)「視聴覚機器をもっと使いこなそう」             |
| 第 18 号 (2004.08.16.)「メルマガこうしつ」バックナ<br>ンバーのご案内」    | 第 39 号 (2005.6.20.)「動機付けってなんだろう 1」              |
| 第 19 号 (2004.08.30.)「敬語は必要ですか」                    | 第 40 号 (2005.7.4.)「動機付けってなんだろう 2」               |
| 第 20 号 (2004.09.13.)「いいスピーチとはどんなスピー<br>チ」         | 第 41 号 (2005.7.19.)「そうだ・ようだ・らしい・だろう」            |
| 第 21 号 (2004.09.27.)「いろいろあるぞ国際交流基金の研<br>修」        | 第 42 号 (2005.8.1.)「日本文化と日本事情」                   |
|   | 第 43 号 (2005.8.15.)「会話授業を考える講座紙上再現 1」           |
|   | 第 44 号 (2005.8.29.)「会話授業を考える講座紙上再現・<br>基本練習編」   |
|   | 第 45 号 (2005.9.14.)「会話授業を考える講座紙上再現・<br>応用練習編」   |